

中世イングランド教会と首位権論争 (下)

山代 宏道

3 ヨーク大司教サースタン¹⁾

(1) 就任から辞任まで

カンタベリー大司教ランフランクがヨーク大司教トーマス1世に対し服従(従順)誓願を要求することで開始された首位権論争であったが、1070年代と比べると、本節を始める1114年までには、異なった様相を呈するようになってきていた。当初は、大司教たち自身が中心となって教会参事会からのエネルギーを引き出していたのであったが、1114年ごろまでには、論争への対応において各大司教座の参事会員たちがイニシアティブを取るようになった。カンタベリー大司教座教会では修道参事会(monastic chapter)を構成する修道士たちが130人ほどになり、かれらは一団となって自分たちの既得の諸権利を守るため全力を傾けた。ヨーク大司教座教会は在俗聖職者(secular canon)が参事会を構成していたが²⁾、9名の参事会員はカンタベリー大司教からの服従誓願の要求に必死で抵抗を続けていた。こうした状況下では、いずれかの大司教が妥協案を受容することが可能であったかどうかは疑問である。もし、大司教があえて妥協するならば、かれは参事会員の怒りをかい、かれらの協力を失うことになったであろう³⁾。

こうしたなかで、1114年4月28日ラルフ(Ralph, 在位1114-22)がカンタベリー大司教に選任された。また、同年8月16日国王ヘンリー1世(在位、1100-35)は、ヨーク大司教位に自らのチャブレン(礼拝堂聖職者)であったサースタン(Thurstan, 在位1114-40)を任命した。この時から两大司教座間の首位権論争は新たな勢いを与えられていく⁴⁾。

バーロー(F. Barlow)は、健康がすぐれなかったことがラルフを短気にし、

自らの権利についての気難しい防衛者にしたと考⁵⁾えている。しかし、ラルフの立場は、上述したような当時のカンタベリー教会参事会員の意思に基づくものであった。それを体現しながらヨーク大司教サースタンに服従誓願を要求し、カンタベリー教会の首位権を認めさせようとしていったことを忘れるべきではない。以下、本節では、大司教サースタンの行動を中心に首位権論争の展開をみていきたい。

サースタンのヨーク大司教在位期間は四分の一世紀にもわたる長いものであるが、かれがヨーク教会において大司教としての十分な宗教的務めを果たすことができるまでには、追放を含む7年間におよぶ労苦に耐ねばならなかった。なぜか。それはかれ自身に起因するものであったのか、あるいは教会参事会が強制したのか。たしかに、サースタンは、ラルフの要求に抵抗しながら踏み止まって争わねばならなかった。

ここで、サースタンの立場を簡単にまとめておきたい。カンタベリー大司教ラルフからの服従誓願の要求に対し、サースタンはどう行動すべきかヨーク教会の参事会員たちに相談した。参事会員たちは、誓願を拒絶することが、ラルフの主張を支持する国王ヘンリー1世の怒りをかい、ひいてはヨーク教会の財産没収などの事態を引き起こすかもしれないと懸念した。逆に、誓願に同意することは、それまでかれらが闘ってきた大義の放棄を意味した。したがって、参事会員たちは、サースタンを信頼し行動の決定をかれに任せたのである。サースタンは国王に対し、1) 他の王国でひとりの首都大司教がもうひとりに服従請願しているところはなく、イングランドでそれがなされるのは不適當である、2) カンタベリー大司教に服従誓願をしていて、もし同大司教と国王が対立した時には、サースタンとしては前者につく以外選択の余地がなくなるではないか、と主張した。このように自己の立場を明らかにしながらも、サースタンは、この問題を解決できるのはローマ教皇のみであると考え、参事会員に対しては教皇からの助言を求めてローマに行く意思を表明する。かれらはそれを支持した。⁶⁾

1115年ウェストミンスターでの国王会議において両大司教は再び対立する。

カンタベリー側が服従誓願を要求し、ヨーク側はそれを拒絶し、ローマ行きの許可を国王に求める。それは許可されることなくゲームは終り、两大司教は次回にそなえ準備をした。⁷⁾

1116年3月ソールズベリー会議でも两大司教間の対立が引き起こされたが、そこでは首位権論争における一大転期が訪れる。まず、国王ヘンリー1世は、服従誓願を要求する大司教ラルフを公然と支持した。さらに国王は、サースタンが過去の好意に感謝しないと非難し、もし命令に従わないならサースタンならびに親族まで苦しむことになると脅かした。⁸⁾これに対し、サースタンがとった行動は注目される。かれは、2年前に任命された大司教位を国王に委ね辞任したのである。驚きが国中に広がった。⁹⁾それは、ニコール(D. Nicholl)の言うように、サースタンの断固たる行為を目撃して、あるいは、昇進を国王のパトロネジに負っていたサースタンのような宮廷(礼拝堂)出身聖職者が、それほど独立的な行動をとり、自らの高位に執着しないという事実により引き起こされた驚きであった。¹⁰⁾

サースタン辞任をめぐることは、いろいろの見解がある。敵対するカンタベリーの修道士で歴史家エドマーは、その辞任がサースタン自身の頑固さと、かれを支持し、また、けしかけてきたヨーク教会聖職者たちの利己主義に起因するものである、と非難している。ニコールの見解は興味深い。陽気で快活な人でも暗く非合理的な一瞬をもつものであり、サースタンも18ヵ月に及ぶ緊張のすえ衝動的にその問題を処理しようとしたのかもしれない、¹¹⁾と。

しかし、ニコールの真意は、サースタンの行動は単なる衝動的なものではなかったと理解するところにある。ニコールは、大司教アンセルムの行動のサースタンに対する影響を示唆する。サースタンは国王に仕えていた時、身近にアンセルムを見ながら、アンセルムが国王ヘンリー1世の怒りと抵抗にもかかわらず、ローマ教皇によって提唱された改革原理を静かに実行していったのを目撃してきていた。そうしたアンセルムと国王との間の争いは、サースタンに深い印象を与えた。¹²⁾サースタンは、会議出席の時点で辞任を決意し、追放されることも覚悟していた。実際、まもなく追放される。アンセルムと同様、サース

タンは追放中にローマ教皇と接触し、そのことでイングランド教会を、ローマ教皇を頂点とする大陸の教会ヒエラルヒーへと結びつけていった。

さらに、ニコールはつぎのような論拠に立ってサースタンの行動を合理的なものであると説明する。ヨーク大司教がソールズベリーに発つ直前に2通の教皇書簡が届けられた。1通はヨークの聖職者宛、もう1通はサースタンからカンタベリー大司教ラルフに手渡されるはずのものであった。両方とも同主旨のもので、教皇グレゴリー1世の指示に基づいて、ラルフがサースタンから服従請願を要求するのを禁止し、もしラルフがサースタン叙階を拒絶するなら、ヨーク大司教区の属司教たちが叙階すべきである、というものである。¹³⁾ こうしたローマ教皇からの支持を背景にしてサースタンは会議に出席した。そこでの辞任という行動は計算されたものであって、国王の翻意を促すものであった、と理解すべきであろう。サースタンとしては教皇書簡を国王に呈示できたはずであるが、かれはそのためのタイミングを待つ。首位権論争の経過を現在ふり返って見る時、それが長びいたひとつの原因は、サースタンが、かつて自ら仕えた国王ヘンリー1世の立場や考え方を熟知しており、国王に受け入れられるような形で、しかもタイミングを見計らって、ヨーク教会の立場を決定的に有利にする証拠を呈示するために費した時間の長さゆえであったことがわかる。

1116年のサースタンの大司教辞任発言について、行動決定をサースタンに委ねていたヨーク教会参事会は、かれの行動を全面的に支持している。サースタンが男らしく振舞ったことを誇りにし、かれ以外の何者をも大司教としてもつことはないであろう、と支持表明をした。¹⁴⁾

では、国王ヘンリー1世の対応はどうか。記述したように、1116年ソールズベリー会議直前に、サースタンはヨーク教会の立場を支持する教皇書簡を受け取っていた。かれがヘンリー1世に教皇書簡を呈示できなかったのは、カンタベリー側に対する国王の断固たる支持であった。国王の翻意によってのみ、ヨーク教会にとっての悲惨な結果を招くことなく教皇の意図を実行しえたであろう。しかし、現実には、サースタンの辞任表明によってヘンリー1世の態度を変えることはできなかった。¹⁵⁾

しかし、ここで注目すべきは、国王とヨーク大司教との関係である。かつて国王に仕え、その働きのゆえに大司教に任命されていたサースタンとヘンリー1世との個人的信頼関係である。国王は、サースタンの辞任表明後も、他の人物を大司教位に任命することはなかった。また、サースタンが大司教位を辞任していた数ヶ月間、臣下たちに対しサースタンに大司教称号を与えるように命じているのである¹⁶⁾。こうしてみると、サースタンの辞任によってかれとヘンリー1世との関係が決定的に悪化した、と判断することはできない。

ところで、カンタベリー側の対応はどうか。大司教ラルフの対応を簡単にまとめると、かれは、カンタベリー教会に対する国王の支持を頼りにしながら、首位権の主張をヨーク側に押しつけた。国王の依頼で和解策を求めて1116年から翌年にかけてローマへと旅する¹⁷⁾が、ラルフ自身の老齢・病気・外交センスの欠如もあって、自らローマ教皇パスカル2世 (Paschal II, 在位1099-1118) に会って事情を説明することもなく、かえってカンタベリー側の服従請願の要求を禁止され、サースタン叙階を命ずる教皇の書簡を受け取るようになった。その意味では、ヘンリー1世がラルフに期待した旅行の目的は失敗に終わったのである。ラルフとしては、それゆえ、自分がイングランドから離れているかぎりサースタン叙階は不可能であろうと判断し、ノルマンディーに滞在しながら好機を待ったのである¹⁸⁾。そうするうちに、1118年1月、サースタンの立場を支持しラルフの要求を厳しく禁止していたパスカル2世が死亡した²⁰⁾。

パスカル2世の死はヨーク側にとって大打撃であったが、幸いにも、次に教皇となったゲラシウス2世 (Gelasius II, 在位1118-19) も、それまでヨーク教会の立場を支持してきた人物であった。同教皇は敵対する神聖ローマ皇帝ハインリヒ5世の進撃を逃れて、大部分の枢機卿たちと共にローマを発ちフランスへと向かった。このニュースを聞いた大司教サースタンは迅速に行動する。1118年秋かれはハウスホールドと共に、出国を許さない国王ヘンリー1世には気づかれないように秘密のうちに出発したが、ドーヴァーで阻止された²¹⁾。だが、使者だけはジェノアにいた教皇のもとに達し、サースタンの苦境について説明する。教皇ゲラシウス2世はすでに事情に通じており、サースタンのためにす

ばやく行動した。すなわち、3通の短い手紙を書いた。第1に国王ヘンリー1世宛、サースタンの取り扱いを悲しみ、カンタベリー大司教ラルフが前教皇の支持に従ってサースタンを叙階しないなら、両大司教は裁判のため教皇のもとへ出頭しなければならない。第2にラルフ宛、かれの不服従と正義無視は教皇にとって失望、かたくなな心をすてサースタンを叙階し、論争解決のためサースタンと教皇のところへ出頭せよ。第3にサースタン宛、かれが耐えてきた不正義について同情的に言及し、ラルフが服従誓願を要求し続けるなら、1人でも教皇のもとへ来るように、という内容であった。²²⁾ サースタンは、こうした教皇からの支持に力づけられたに違いない。しかし、またしても、強力な味方である教皇ゲラシウス2世が1119年死亡する。²³⁾

(2) 教皇による叙階

つぎのローマ教皇カリクストゥス2世 (Calixtus II, 在位1119-24) は、登位後、首位権論争についての説明をうけると、カンタベリー大司教ラルフの出頭を命じた。しかし、ラルフは、かれの慢性的病氣 (中風) のせいにしながら出頭できない弁解の手紙を送り返した。そこでかれは、自分がサースタンを叙階せよとの教皇命令を受けなかったこと、また、教皇は当該問題でヨークの肩をもつことなく、自ら検討するまで一方を非難するな、と述べている。まさに、ニコールの言うように、「いかに上位者を遠ざけ怒らせるかというモデル」のような手紙である。²⁴⁾ それゆえ教皇は、自分が首位権論争に関して偏向しているとされたことに怒り、ラルフ宛、懲戒する書簡を送った。そこでは、ラルフに対する前任教皇の指示が明確であったことが強調されている。²⁵⁾

ニコールは、この時期の両大司教の状況に言及し、混乱しモラルの下ったカンタベリー側に比べ、²⁷⁾ 自分たちの勝利を待ち望んでいたヨーク側が、すぐれた情報活動によってローマ教皇一行がブルゴーニュフランスを通して進む情報を得ていた、とする。さらに、ヨーク側は、1119年5月の公式発表以前にも同年秋開催のランス教会会議について知り、支持獲得のため教皇側近への働きかけを開始していた。²⁸⁾

ところで、サースタンは1119年秋ローマ教皇カリクストゥス2世と会う。大司教がいかにして国王から出国許可を得たのかは明確ではない。この点でも、カンタベリー側とヨーク側の記録は相違している。エドマーは、サースタンが国王の許可なく教皇から叙階されないとの約束で出国を許されたが、かれは直ぐにその約束を破った、と非難する。これに対し、ヒュー＝ザ＝チャンターは、サースタンが教皇から叙階を受けないとの約束を拒絶したとするが、さらに、国王は教会会議に招集されていたサースタンを出国させざるを得なかったと述べている。²⁹⁾

1119年9月までにサースタンはツールで教皇一行に加わり、シャルトルではあらかじめ派遣していたヨーク教会の聖職者たちと合流した。さらにプロア、オルレアン、エタンプ、パリを通過して、10月18日までにランスへと到着した。かれは教皇や枢機卿たちから、教会原理のための受難者として歓迎され、かれらとの間に個人的友情をきずくことができた。ニコールは、そうした個人的接触のもたらした利点に注目している。何が起きているのかを把握するためのカンタベリー側の手探りするような努力に比べ、事態の取り扱いにおいてヨーク側が示した自信と確かな手応えが印象深い。³⁰⁾まさに外交と情報収集能力においてヨーク側は優位に立っている。しかし、同時に、それはサースタンの追放生活とヨーク教会や大司教区の宗教的不都合と引き換えにもたらされたものであったことも忘れてはならない。

また、もう1点注目すべきは、10月初めヨーク教会の聖職者たちが教皇カリクストゥス2世にパリで謁見する機会を得た時、かれらは、カリクストゥスがそれまで続いた修道士出身の教皇たちと違い在俗聖職者出身であるという事実³¹⁾に訴えかけながらサースタン支持を要請していることである。その説得方法は、対立するカンタベリー側の修道士たちを念頭において採用されたものであろう。さらに、そのことは、当時のより広い教会世界で顕著であった修道士と在俗聖職者とのヘゲモニー争いという一面が、この首位権論争にも含まれていたことを示唆しているのである。³²⁾

1119年10月19日教会会議開始の前日、大司教サースタンはランス大司教座教

会で教皇自身によって叙階された。その時、カンタベリー大司教ラルフを含むイングランド司教たちは到着が遅れ、叙階儀式を阻止することができなかつた³⁴⁾。国王ヘンリーは、サースタンが約束を破ったとして、ヨーク大司教位を没収する。これに対し、ローマ教皇は、11月サースタンに大司教の象徴であるパリュムを授け、さらに国王に書簡を送る。服従誓願を要求し続けるラルフを聖務停止とし、サースタンが帰るまでヨークに聖務禁止令を課したことを伝えた³⁵⁾。このように、ローマ教皇によるサースタンの救済措置が講じられた。

ところで、ローマ教皇カリクストゥス2世は、11月遅くジゾール (Gisors) でヘンリー1世と会談し、教皇使節アンセルムをヘンリーの領土から引き揚げ、将来は国王の要請によってのみイングランドへ教皇使節を派遣することを約束した³⁶⁾。その後、教皇一行はフランスを南下、サースタンも同行した。途中、教皇はサースタンにパリュム着用を許し、祭壇聖別・教会献堂の儀式を補助させ、さらに聖遺物を与えている³⁷⁾。そして、1120年3月教皇は南フランスのギャップ (Gap) で別れるサースタンに対し、国王・カンタベリー大司教・ヨークの信者たちに宛てた書簡を託したのであった。内容は前述のゲラシウス2世の書簡と同様であるが、それらの日付ならびに内容分析についてはチャーニー (M. Cheney) の研究がある。ここでは、ヨーク大司教がカンタベリー大司教に服従誓願をすることが禁止されたことを確認しておきたい³⁸⁾。

1120年中にはサースタンは帰国できないままであったが、イングランド王ヘンリー1世、フランス王ルイ6世、教皇使節クノ (Cuno)³⁹⁾、教皇カリクストゥス2世各人の信頼を得て、まさに「平和の使者」として活躍している。かれは、ヘンリーとルイとを会わせ和解をとりつける⁴⁰⁾。その結果、ヘンリーの息子ウィリアムは、ノルマンディーの正当な支配者としてルイに臣従礼を行なった。また、サースタンがヘンリーの信頼を確かにしたのは、同年夏、教皇使節が大司教のヨーク復帰を認めないヘンリーを破門しイングランドに聖務禁止令を課そうとした時、それに同意しなかつた事実である⁴¹⁾。サースタンのこうした行動は、国王を当惑させる事態に追い込み、かれの怒りをかう形で帰国するよりも、国王が帰国許可を与えてくれるタイミングを待つという判断に基づいていたとい

えよう。

その後事態は急変する。11月25日ヘンリーは息子と主要な臣下の多くをホワイトシップ難破事故で失った。1121年1月29日には、国王はアデリザ(Adeliza)と再婚している。他方、国王はカンタベリー大司教ラルフや司教たちに対し、サースタンの帰国を認めないなら、疑いなくラルフは聖務を停止され、イングランドに禁止令が課されるであろうことを明らかにしていた。その結果、ラルフは譲歩し、サースタンはイングランド帰国を許されて1月31日ウィンザーでの国王の結婚祝宴に出席することができた。⁴²⁾

ローマ教皇によって叙階され、やっとヨーク大司教座に戻ったサースタンであったが、その後、カンタベリー側がかれを平穏のうちに置いたわけではない。1121年春カンタベリーの修道士たちは、絶望的な手段に訴えた。すなわち、カンタベリー教会の主張を正当化する一連の教皇書簡を偽造したのである。これらの偽造文書の作者と作成時期についてはサザン(R. W. Southern)の研究があるが、⁴³⁾詳細は後述する。

1121年ミカエルマスの国王会議にサースタンは招集されたが、国王ヘンリーは自らの体面を救うため、サースタンに対し、ラルフへの一代限りの個人的服従誓願だけでもなすように命じた。サースタンが平和のためにその措置を受け入れ、必要なら教皇の許可を得ることさえ促した。⁴⁴⁾

サースタンは、その要求を拒絶しながらも、ローマ教皇から与えられていたヨーク教会への教皇書簡(特権)を会議の場で呈示することは控えた。またしても、国王を当惑させるのを避けるためである。しかし、国王との私的会見が実現すると、サースタンは、カンタベリー大司教に対する服従誓願からヨーク大司教を解放した教皇書簡をヘンリーに示した。その結果、ヘンリーはゲームが終わったことを悟ったのである。⁴⁵⁾

(3) 最終段階

ローマ教皇の命令にもかかわらず執拗にサースタンに服従誓願を要求し続けていたカンタベリー大司教ラルフは、1122年10月20日死亡した。まもなく1123

年3月ローマ教会会議への招集状が高位聖職者に送られてくる。空位となったカンタベリー大司教を選出することが必要となった。そのため2月2日グロスター会議が開かれる。⁴⁷⁾

同会議で新大司教に選出されたのが、修道士でも在俗聖職者でもなく、律修聖職者 (regular canon) であったウィリアム＝オヴ＝コルベイル (William of Corbeil, 在位1123-36) である。かれの適格性を国王ヘンリー1世から問われたサースタンは、自ら律修聖職者たちの擁護者であったこともあり、ウィリアムを推薦している。⁴⁸⁾

サースタンは教皇ホノリウス1世の規定に基づいて、新たに大司教に選任されたウィリアムを叙階する権利を主張しながらも、叙階式をカンタベリー大司教座教会でとり行なうという好意的申し出をした。しかし、これに対し、ウィリアムは自らをイングランド全体の首位大司教として叙階するように要求する。それはサースタンにとって受け入れられる条件ではなかった。⁴⁹⁾ 結局、ウィリアムは、2月18日自らの属司教たちによって叙階された。その後、両大司教は別々にローマへと出発した。⁵⁰⁾

ローマ教皇庁では、国王会議において選出されたウィリアム選挙の適法性が問題にされたが、サースタンの助言もあってどうにか承認され、ウィリアムはパトリウムを受けることができた。⁵¹⁾ しかし、またもやこれまでの対立が引き起こされる。すなわち、ウィリアムは自分たちの首位権の主張をなしヨーク側を非難したのである。その際、カンタベリー側は、2年前に教会文書室で発見されたとする一連の教皇書簡を呈示した。⁵²⁾ かれらの首位権を立証するに十分な文書であった。ところで、それらの文書が枢機卿たちの前に持ち出され真偽のほどが吟味されると、カンタベリー側は窮地に陥る。証拠文書が教皇印璽をもっていないのかとの問いに、かれらは持ってきたのは写しであると答え、印璽の有無については、いったん別室に引き下がって相談の後、失われたと返答する始末であった。さらに1人が古い時代には教皇は印璽を用いなかったと発言し、枢機卿により教皇庁にある同時代の文書には印璽が付いていると反論されるに及び、カンタベリー側が呈示した証拠文書が偽造されたものであることが判明

した。さらにかれらは、教皇側近や枢機卿に対し買取工作を施すが成功することにはなかつた⁵³⁾。

サースタンは、携えてきたヨーク教会への教皇の特権文書の写しを呈示することで自分たちを守ることができた。結局、この問題は延期され、両大司教は帰国し十分に用意したうえで、教皇使節がイングランドで開催する教会会議に出席すべきことが決定された⁵⁴⁾。

1124年12月13日ローマ教皇カリクストゥス2世は死亡し、ホノリウス2世(Honolius II, 在位1124-30)があとを継ぐ。かれは律修聖職者出身であつた⁵⁵⁾。カンタベリー大司教ウィリアムも律修聖職者出身であり、その意味では、この時期における同グループの隆盛を象徴的に示すものであろう。

1125年9月教皇使節ジョン=オヴ=クレマ(John Of Crema)は、イングランドで教会会議を開き教会改革問題を討議したが、首位権論争に関しても調停案を作成した。それは、大司教ウィリアムは大司教サースタンに対してチェスター、バンゴール、セント=アサフ(St Asaph)司教座を放棄する。かわりにサースタンは、言葉によってウィリアムを首位大司教として受け入れるが、もし教皇が許すならサースタンの後継者たちは首位大司教としてのカンタベリー大司教に服従を約束する、という内容であつた⁵⁶⁾。

国王ヘンリー1世は、両大司教間の長びく対立を終らせるべく調停案の受け入れを命じたが、もしローマ教皇がそれを認めない場合には、いずれの大司教もローマにおいて訴訟手続を始めるべきではないことを強調した⁵⁷⁾。問題がイングランド外で裁かれるのを警戒していたのである。

両大司教は別々に旅行してローマ教皇庁へ到着した。カンタベリー大司教は調停案にある司教座放棄に同意できないことを明らかにする。再びお馴染みの論争がくり返される。大司教ウィリアムとしては、サースタンに対する訴訟手続を始める以外に方法は残されていなかった。しかし、それは国王ヘンリーがあらかじめ禁止していたことであり、ウィリアムは国王の命令に逆らえばいかなる事態を引き起こすか十分に理解していた。こうして大司教ウィリアムは、サースタンに対し首位権を認めさせることに失敗したのである⁵⁸⁾。

4 首位権論争の歴史的位置づけ

これまで、1070年代から1120年代までの約半世紀間にわたってカンタベリー大司教座とヨーク大司教座の間で争われてきた首位権論争の過程を跡づけてきた。その論争には、両大司教ばかりではなく、イングランド国王、司教、さらにローマ教皇が加わっていった。ノルマン征服後のこの時期、イングランドでは3人の国王が統治している。かれらの教会政策の基本は、支配領域内の教会問題は自分たち国王のイニシアティブで処理するというものであった。その意味では、アングロ=ノルマン国家と同様にアングロ=ノルマン教会の回りにも、ローマ教皇の影響力の浸透をチェックする障壁が築かれていた、といえよう。⁵⁹⁾

しかし同時に、この時期ヨーロッパ教会世界においてローマ教皇の至上権確立がめざされ、教皇を頂上とするヒエラルヒーが成立していく。そのような状況下で、イングランド教会が孤立して存在することは不可能であった。イングランドと大陸、とくにローマ教皇庁との接触はますます多くなる⁶⁰⁾。接触、それがイングランドを取り込んでいく動きの結果か、外へ飛び出していく動きの結果か、いずれにしても不可避的であった。わが国で最近発表された2論文でもそのことが明示されている。佐藤伊久男氏は「十二世紀はイングランドにおける<教会>と王権との関係のまさに一大転期であった。それはイングランド王国が教皇権を中心とする一つの政治的構成体としての<ヨーロッパ>に種々の軋轢を伴いながら組み込まれていく過程であった」とされる。また、関口武彦氏は「この頃(1140年から1150年一引用者)から教皇統治権は現実には教会構造の最下層にまで浸透し始める。つまりローマ教会と地方教会が有機的に連結されて、1つの巨大なキリスト教組織体が動き出した」とされる。いずれの論文も本稿の対象時期の直後の時期を中心的に取り扱っているが、ここでの首位権論争の究明を通して、両氏の指摘内容がすでにうかがえるのである。⁶¹⁾

以下、首位権論争についての歴史的位置づけを、(1)国王と大司教、(2)イングランドとローマ、(3)大司教と参事会、これら3つの視点から行なう。もっとも、各視点に関するテーマだけで独立論文が可能なほどであるが、ここでは紙幅の

制限もあり、首位権論争についての特徴あるいは歴史的意義を簡潔に列挙しておくにとどめたい。

(1) 国王と大司教

第1に、カンタベリー大司教ランフランクによって始められた首位権の主張は、いかなる形で国王と関わっていたのか。ランフランクの主張の基礎には、カンタベリー教会の首位権確立がイングランド王国の統一にとって必須であるとの認識があった。確立した首位大司教なしには、ヨークへ来襲するデイン人・ノルウェー人・スコットランド人のだれかが、ヨーク大司教と「気まぐれで反逆的なヨークシャーの人々」によって国王とされ、王国が分裂するかもしれない、というものである。こうした主張は、征服後いまだ北部の支配権を確立していなかったウィリアム1世にとっては十分に説得的であったにちがいない。⁶²⁾

しかし、北部の状況は時代とともに変わっていく。デイン人やノルウェー人の来襲はなくなり、スコットランド王はイングランド王と家族的・封建的きずなで結びつき後者の支配下に入った。いまやヨーク大司教は、王国の統一にとって危険であるよりも、むしろそうした結びつき維持のために有用な存在となったのである。⁶³⁾

第2に、首位権論争は、ノルマン征服後のイングランド教会組織の再編、とくに教区制確立に向けてのゆさぶりの中で起こった現象として位置づけられよう。1072年教会会議でリッチフィールド・リンカーン・ウスター各司教座のカンタベリー大司教区所属が討議・決定されたし、⁶⁴⁾1125年のローマ教皇使節の調停案においても、別の3司教座の所属移動が提案されていたほどである。また、1070年頃ウスター司教ウルフスタン (Wulfstan, 在位1066-95) がカンタベリー大司教ランフランクになした服従誓願も、アングロ=サクソン遺制のアングロ=ノルマン教会体制への組み込みを象徴するものとして注目すべきである。⁶⁵⁾

第3に、イングランドの首位権は国王戴冠権と結びついていた。⁶⁶⁾ランフランクは、すべての高位聖職者に対する権限を主張したが、同時に、国王を戴冠・塗油するかれの権利は、王位継承に対する承認権としてみなされていた。さら

にかれば、ウィリアム不在中は王国統治を託されており、あたかも国王との共同統治者としての地位にあった。つづく大司教アンセルムも、ランフランクと同様の権限・立場を主張していったのである。⁶⁷⁾

グリーン (J. A. Green) は、ヘンリー 1 世が定期的な戴冠儀式を取り止めたとしているが、その理由のひとつは、戴冠権限をめぐる生じ易い対立のゆえであった。⁶⁸⁾ 1109年クリスマス、ヨーク大司教トーマス 2 世が戴冠しようとした時、空位のカンタベリー大司教の代りにロンドン司教が反対した。⁶⁹⁾ 1126年クリスマスには、大司教サースタンは大司教ウィリアムによって戴冠権限の行使を阻止されている。⁷⁰⁾ 1135年12月22日スティーヴンを国王に戴冠したのは同大司教ウィリアムであった。⁷¹⁾

(2) イングランドとローマ

第 1 に、この時期の国王たちは首位権論争をイングランド教会問題として捉え、それが国内で解決されることを望んでいた。この問題に限らず、教会改革全般について討議・解決するための教皇使節の入国もできるだけ阻止する態度を取り続けていく。⁷²⁾ ヘンリー 1 世は、教皇カリクストゥス 2 世と会見した際、国王の要請でのみ教皇使節をイングランドに派遣できることを承認させた。グリーンは、こうした国王の政策は、カンタベリー大司教たちが教皇使節の権威を認めるのに消極的であったことにより助けられた、と判断している。⁷³⁾

しかし、国王の対ローマ教皇庁政策は、他面では、国王にとって重大なノルマンディー政策によって左右されていた事実も忘れてはならない。とりわけ、ヘンリー 1 世にとってノルマンディー併合とそこでの支配権確立のためには、教皇の支持が不可欠であった。⁷⁴⁾ 国王にとって、首位権論争とそれを契機とするローマ教皇の影響力の浸透をどう取り扱うかという問題は、ノルマンディー支配を含むアングロ＝ノルマン王国の保全政策とそれとの関連でのローマ教皇庁へのアプローチの問題と緊密に結びついていたのである。

第 2 に、イングランドの両大司教がローマ教皇の権威をどう捉えていたのが重要である。ヨーク側がその主張の基礎とした、教皇グレゴリー 1 世の聖オー

ガスティン宛書簡に見られる、两大司教間の優先順位はどちらが先に叙階されたかによって決定されるとの教皇見解を、そもそもカンタベリー側が受け入れていれば、こうした対立は起こらなかったであろう。また、もし起こっていたとしてもそれほど長びくことはなかったにちがいない。⁷⁵⁾

しかし、実際には、カンタベリー大司教は歴史的現実としてのカンタベリー教会の伝統的優位性を主張しており、その限りではローマ教皇の裁決を全面的に受け入れる用意はなかった。そればかりか、大司教ラルフに見られたように国王の支持を得ているかぎり、教皇の命令に反抗的な態度を示すことさえあったのである。⁷⁶⁾ 11世紀後半から顕著になるローマ教皇による首位権の確立、教会ヒエラルヒー体制成立への動きも、ヨーロッパ各地方、この場合イングランドにおいて国王と大司教とが結びついて反対するなら、それほど順調に展開していったわけではない。

だが、首位権論争を通じて見られたもうひとつの面は、ひとたびイングランド大司教の側からローマ教皇庁への訴えかけがなされる場合、すなわち飛び出すような形で接触がなされた場合、それに対応して開始されるローマ教皇からイングランドへの影響力の浸透は著しいものであった。かつてアンセルムの追放とローマ教皇との接触は、結果的にイングランドへ聖職叙任権闘争を持ち込み、⁷⁷⁾ いまサースタンの追放と教皇との接触は、国王たちがアングロ＝ノルマン教会の回りに築いていた障壁にはるかに大きな穴を開けたのである。「サースタン（の事例）は、この時期イングランド教会に対する国王支配がいかに威圧的・効果的であるとしても、それ（支配）における基本的弱さを示していた」⁷⁸⁾ とするカンター（N. F. Cantor）の解釈を支持しておきたい。

(3) 大司教と参事会—終りにかえて—

首位権論争の過程を通じて、各大司教座教会の参事会としてのアイデンティティーが自覚されるようになる。それは1120年代になって、カンタベリー教会の修道参事会においてアングロ＝サクソン人修道士とノルマン人修道士との融合が実現していく過程と符合している。まさに修道参事会としての新たな段階⁷⁹⁾

に入ったといえよう。その意味では、征服以前からのベネディクト修道士集団としての伝統に依拠しながら自らの特権的地位を維持できる時代は過ぎ去りつつあった。

他方、ヨーク大司教座教会の場合、すでに征服後最初のノルマン人大司教であったトーマス1世の時から新たな出発が見られた。征服後のヨーク地方での反乱とウィリアム1世による反乱鎮圧後、再建されたヨーク教会参事会は在俗聖職者が構成することになった。そこではアングロ＝サクソンの要素とノルマンの要素の対立をそれほど重視する必要はなく、とりあえずノルマン的要素のみを考えればよい。教会参事会員の数的増加や教会施設・組織の整備は、構成員たちに新たなアイデンティティーの自覚をもたらしていった。

したがって、この首位権論争は、一面では、アングロ＝サクソン時代からの古くて長いベネディクト修道院的伝統に依拠するカンタベリー大司教座と、征服後新たに在俗聖職者によって再建されたヨーク大司教座の対立としても捉えることができよう。

さらに、他面では、イングランド国王の伝統的な教会政策と結びつき、国王の庇護の下に古い伝統に依存しながら自己の首位権を主張していったカンタベリー側と、新たにイングランドへの影響力の浸透を図るローマ教皇と結びつきながらカンタベリー大司教との対等性を主張していったヨーク側との対立としても理解できよう。そして、ひとまず、後者が勝利したともいえよう。その意味では、長い歴史的脈絡でみれば、ヨーロッパ教会またイングランド教会におけるベネディクト修道士から在俗聖職者へのヘゲモニーの転換として位置づけることが可能である。

しかし、ここで注意すべき点は、大司教についてみた場合、この首位権論争を上述のような対立の図式、すなわち修道士出身大司教を戴くカンタベリー教会と在俗聖職者出身大司教を戴くヨーク教会との対立として捉えることはできない、ということである。それよりもむしろ強調されるべきは、いずれの大司教も自ら代表する大司教座の伝統、教会参事会の既得特権を守ろうとしていた、という側面である。その限りでは、カンタベリー大司教としての主張・立場に

において、ベネディクト修道士出身であったランフランクやアンセルム、修道士としての戒律遵守を止めていたラルフ、そして律修聖職者出身であったウィリアムのあいだに相違はなかったのである。

たしかに、首位権論争は大司教ランフランクによって始められたかもしれない。しかし、その論争にエネルギーを与え長びかせていったのは、時に大司教を励まし時にかれにプレッシャーをかけ続けた教会参事会であった。首位権論争をふり返ってみる時、勝利あるいは敗北が論争当事者が考えたほど重大なものであったのかどうか、また、ヨーク側が抵抗したカンタベリーの首位権を受け入れていた場合、どれほど大きな相違が生じていたのか疑問視されるかもしれない。しかし、こうした感想は、ニコールも言うように、後代の人々のぜいたくであり、当時の人々に許された問いかけではない。むしろ、ディキンソン (J. C. Dickinson) の指摘するごとく、首位権論争はとるにたらない教会騒動のひとつであったわけではなく、実際の意味合いをもっていた。すなわち、重大な公式行事でどちらの大司教が名誉ある席につくか、またヨーク大司教はカンタベリー大司教区内で自分の前に大司教の十字架をかざせるのか、といった問いへの返答としてである⁸⁰⁾。こうしてみると、首位権論争は、各大司教の下に自分たちのアンデンティティーを自覚し始めた大司教座教会参事会によるシンボルをめぐる争いであった、といえるのかもしれない。

註

- 1) 本稿は、拙稿「中世イングランド教会と首位権論争(上)」『広島大学文学部紀要』49 (1990年3月) pp. 81-102の統編である。
- 2) 拙稿「ノルマン征服後の司教座教会参事会」『西洋史学』132 (1984年3月) pp. 1-18.
- 3) D. Nicholl, *Thurstan, Archbishop of York (1114-1140)*. York, 1964. p. 37.
- 4) C. Johnson ed., *Hugh The Chantor, The History of the Church of York 1066-1127* [以下、HC と略記]. London, 1967(1961). pp.33-4; D. Bethell, "William of Corbeil and the Canterbury-York," *Journal of Ecclesiastical History*, 19(1968), pp. 145-59. esp. p. 151. サースタン関連年表参照、拙稿「ヨーク大司教サースタン

- と首位権論争』『西洋における異文化接触の史的研究』(平成元年度科研総合研究(A)研究報告書、1990年3月) pp. 38-42. J. E. Burton ed., *English Episcopal Acta, V: York 1070-1154*. Oxford, 1988. pp. 113-8.
- 5) F. Barlow, *The English Church 1066-1154*. London, 1979. p. 83.
- 6) *HC*, pp.35-6; *op. cit.*, p. 50.
- 7) *HC*, pp. 37-9; Nicholl, *ibid.*, p. 51; M. Rule ed., *Eadmeri Historia Novorum in Anglia* [以下. *EHN* と略記]. RS 81. London, 1965(1884). p.228.
- 8) この脅しはサースタンには通用しなかった。前任者トーマス2世との相違である。Bethell, *op. cit.*, p.151.
- 9) *HC*, pp.41-4; Bethell, *ibid.*; Nicholl, *op. cit.*, p.52.
- 10) Nicholl, *ibid.*; N. F. Cantor, *Church, Kingship, And Lay Investiture in England 1089-1135*. N. Y., 1969(1958). p. 306. この事件はパトロネジの有効性とその限界について示唆深い。拙稿「ヘンリー1世治世と教会一司教と国王パトロネジ」『広島大学文学部紀要』48(1989年1月) pp. 122-42.
- 11) *EHN*, p.238; Nicholl, *op. cit.*, p. 53.
- 12) Nicholl, *ibid.*, p.11.
- 13) *HC.*, p.40; Nicholl, *ibid.*, p.53. 問題は、現実にはヨーク大司教の属司教がダラム司教のみであり、また、新司教の叙階には教会法的に3人の司教の参加が必要であったことである。J. C. Dickinson, *An Ecclesiastical History of England: The Later Middle Ages*. London, 1979. p. 50; Burton, *op. cit.*, p.xx.
- 14) *HC*, pp. 45-6; Nicholl, *op. cit.*, p.54.
- 15) ヒューニザ=チャンターは、国王の意思・気持ちが変りやすく、しばしば矛盾していることを指摘している。 *HC*, 3; Nicholl, *op. cit.*, pp.53-4.
- 16) *HC*, p. 46.
- 17) *HC*, 49-52; Bethell, *op. cit.*, 150, 152.
- 18) 教皇と敵対するハインリヒ5世の陣営に滞在している。 *EHN*, p. 243; Nicholl, *op. cit.*, p.56.
- 19) *HC*, p.51.
- 20) *Ibid.*, p.57; Nicholl, *op. cit.*, pp.56-8.
- 21) サースタンは平服に変装していた。 *HC*, 57.
- 22) *HC*, pp.58-9; Nicholl, *op. cit.*, pp.58-9.
- 23) *HC*, p.61.
- 24) *HC*, pp.62-3; Nicholl, *op. cit.*, p.62 n.58. エドマーはこの手紙と教皇の返書に言及していない。
- 25) *HC*, pp.62-3; Nicholl, *op. cit.*, p.62.
- 26) *HC*, pp.64-5.

- 27) *EHN*, pp.249-51.
- 28) Nicholl, *op. cit.*, p.63.
- 29) *EHN*, p. 255; *HC*, pp.68-9.
- 30) *HC*, pp. 69-71; Nicholl, *op. cit.*, pp.64-5.
- 31) Nicholl, *ibid.*, p.65.
- 32) *HC*, p. 70; Nicholl, *ibid.*
- 33) 拙稿「中世イングランドにおける修道士と在俗聖職者」『史学研究』138 (1977年12月) . pp.25-40.
- 34) *HC*, pp.72-3.
- 35) *HC*, pp.75, 81; Nicholl, *op. cit.*, p.67.
- 36) *EHN*, p. 258; Nicholl, *ibid.*, p.68.
- 37) *HC*, pp.84, 90.
- 38) *HC*, pp.89, 101-4; Nicholl, *op. cit.*, p.69. M. Cheney, "Some Observations on a Papal Privilege of 1120 for the Archbishops of York," *Journal of Ecclesiastical History*, 31(1980), pp.429-39.
- 39) Cheney, *ibid.*, pp.437-8.
- 40) *HC*, p. 97.
- 41) *HC*, p. 95; Nicholl, *op. cit.*, p.72.
- 42) *HC*, pp.99-100; Nicholl, *op. cit.*, pp.73-4.
- 43) R. W. Southern, "The Canterbury Forgeries," *E. H. R.*, 73(1958), pp.193-226.
- 44) *HC*, p.106.
- 45) *HC*, pp.106-7; Nicholl, *op. cit.*, p.82.
- 46) 参事会員たちは、すでに教会のために働けなくなったラルフの死を予期し次の機会を待ち望んでいたという。Southern, *op. cit.*, p.225.
- 47) *HC*, p.108; Nicholl, *op. cit.*, pp.83-4.
- 48) *HC*, p.109.
- 49) T. Arnold ed., *Symeonis Monachi Opera Omnia*, 2 Vols. RS 75. London, 1965(1882-5). II, p. 269; Nicholl, *op. cit.*, p.89.
- 50) *HC*, pp. 109-11.
- 51) *HC*, pp. 112-3; M. Chibnall, *Anglo-Norman England 1066-1166*. Oxford, 1986. p.70.
- 52) *HC*, p. 114; Southern, *op. cit.*, pp.209, 211, 217ff.
- 53) *HC*, pp.114-6; Nicholl, *op. cit.*, p. 90. 61名の枢機卿中、3名がカンタベリー支持。Bethell, *op. cit.*, p.155.
- 54) *HC*, pp. 116-7; Arnold, *op. cit.*, II, p. 273; W. Holtzmann ed., *Papstwerkunden*

- in England, Vols. I, II.* 1970(1930-31). II, pp. 140-1; Nicholl, *op. cit.*, p. 90.
- 55) 関口武彦「<1130年のシスマ>と枢機卿団」(佐藤伊久男・松本宣男共編『歴史における宗教と国家』南窓社刊、1990年)所収、pp. 243-90. 特にp. 259. HC, p. 120.
- 56) HC, pp. 122-3; Nicholl, *op. cit.*, p. 95.
- 57) HC, p. 123; Nicholl, *ibid.*
- 58) HC, pp. 124-7; Nicholl, *ibid.*, p. 96; M. Brett, *The English Church under Henry I.* Oxford, 1975. p. 64.
- 59) 拙稿「アングロ=ノルマン国家再考」『史学研究』183 (1989), pp. 32-51.
- 60) C. Duggan, "From the Conquest to the Death of John," in C. H. Lawrence ed., *The English Church and the Papacy in the Middle Ages.* London, 1965. pp. 65-115.
- 61) 佐藤伊久男「中世中期イングランドの<教会>と王権-転換期としての十二世紀-」(佐藤・松本、前掲書)、pp. 291-333. 特にp. 333. 関口、前掲論文、p. 285.
- 62) ,HC, p. 3; M. Gibson, *Lanfranc of Bec.* Oxford, 1977. pp. 130-1; Chibnall, *op. cit.*, p. 40.
- 63) Nicholl, *op. cit.*, p. 39.
- 64) D. Whitelock *et al.* ed., *Councils and Synods, Vol. I.* Oxford, 1981. pp. 591-620.
- 65) D. C. Douglas ed., *English Historical Documents, Vol. II.* London, 1953. pp. 635-6.
- 66) 戴冠式宣誓の分析から統治理念の諸相を考察したものに、松垣裕「戴冠式宣誓に見える中世イングランド王の統治理念」(上、中、下)『熊本大学文学部論叢』17, 21, 25. (1985-88).
- 67) S. N. Vaughn, "St. Anselm and the English Investiture Controversy Reconsidered," *Journal of Medieval History*, 6(1980), pp. 61-86. esp. pp. 66-7.
- 68) J. A. Green, *The Government of England under Henry I.* Cambridge, 1986. p. 21.
- 69) EHN, p. 212.
- 70) HC, pp. 130-1.
- 71) K. R. Potter ed., *Gesta Stephani.* London, 1955. pp. 6-8. esp. 8 n.1 ; Chibnall, *op. cit.*, p. 85.
- 72) 教皇使節問題については、拙稿「アングロ=ノルマン国家再考」pp. 41-6.
- 73) Green, *op. cit.*, p. 10.
- 74) 拙稿「アングロ=ノルマン国家再考」pp. 43-4.
- 75) Duggan, *op. cit.*, p. 98.

- 76) かつてランフランクは教皇グレゴリー7世の召喚に応じず (Douglas, *op. cit.*, p. 648; Duggan, *op. cit.*, p. 81; Cheney, *op. cit.*, p. 439)、アンセルムも教皇座からの半独立をめざしていた (Vaughn, *op. cit.*, pp. 66, 69)。
- 77) Duggan, *op. cit.*, p. 81.
- 78) Cantor, *op. cit.*, p. 309.
- 79) 拙稿「アングロ＝ノルマン期における修道院共同体」『山口大学教育学部研究論叢』29-1 (1979), pp. 31-42.
- 80) Nicholl, *op. cit.*, p. 100; Dickinson, *op. cit.*, p. 66.

(本稿は平成2年度文部省科学研究費一般研究(C)の研究成果の一部である)

The Medieval English Church and the Primacy Dispute (Part II)

Hiromichi YAMASHIRO

This paper deals with the latter half of the Primacy Dispute, focusing on the reign of Thurstan, Archbishop of York(1114-40). Chapter 3 discussed (1) Thurstan's accession to the archbishopric, the struggle with Ralph, Archbishop of Canterbury, and Thurstan's petition to resign from his office, (2) Thurstan's consecration by the pope himself, (3) the final stage of the Dispute between Thurstan and William of Corbeil, Archbishop of Canterbury.

One of the reasons for the delayed settlement of the Dispute was Thurstan's consideration of good timing for the settlement, without causing too much embarrassment and anger of Henry I and without resulting damages to York cathedral.

In order to clarify the historical significance of the Primacy Dispute, chapter 4 discussed (1) the kings' involvements in the Dispute, (2) the penetration of papal influence into England during the Dispute, (3) the reactions of each cathedral chapter to the Dispute.

At the beginning of the Primacy Dispute, the archbishops took initiatives for the struggle, but gradually the cathedral chapters started playing more active roles. The Primacy Dispute may well be regarded as the struggle over the symbols by the cathedral chapters with their strengthening identities during the period.